

## 「イエシュアのよみがえり」

ヨハネ 20:16～23

### はじめに

イスラエルの罪の贖いとして、イエシュアは十字架にかかれ、そして確かに死なれました。そのご遺体はユダヤ人のしきたりに従って墓に葬られ、墓の入り口には大きな石で封印がなされました。しかしその三日目に、父なる神様はイエシュアをよみがえらせました。マグダラのマリヤは、その墓の入り口が開き、中が空っぽになっていることを最初に発見し、そしてその事実を弟子のペテロともう一人の弟子に告げました。彼らは墓まで走って行き、実際に墓の中にまで入ってその事実を確認し、再び家に帰って行きました。しかしマグダラのマリヤは一人墓に残り、イエシュアを求めて泣いていました。すると墓の中に二人の御使いが現れ、「なぜ泣いているのですか」と彼女に尋ねました。さらにそこへよみがえられたイエシュアご自身が現れ、御使いたちと同じ質問をされました。しかしマリヤは最初それがイエシュアであることが解らなかったと聖書は記しています。なぜ解らなかったのでしょうか。復活されたイエシュアの容姿が、以前とは全く違っていただけでしょうか。しかしこれは後述しますが、イエシュアの手足には十字架の釘の跡があり、わき腹には刺された槍の跡があるので、まったく別の外見になっていたということではなかったと思われまます。筆者ヨハネはその理由については記していませんが、イエシュアご自身が同じような問いかけをしておられる記述にそのヒントがあると考えられます。

#### 【新改訳改訂第3版】

ヨハネ

8:43 あなたがたは、なぜわたしの話していることがわからないのでしょうか。それは、あなたがたがわたしのことばに耳を傾けることができないからです。

ヨハネ

8:46 あなたがたのうちだれか、わたしに罪があると責める者がいますか。わたしが真理を話しているなら、なぜわたしを信じないのですか。

これらの記述は同じヨハネの福音書においてイエシュアがユダヤ人たちに対して語られたものです。アブラハムの子孫である神様に選ばれた民であるはずの彼らイスラエルの民が、その神様から遣わされ、聖書に記された預言の成就者である神様の御子でありメシヤ（キリスト）であるイエシュアを「なぜ…わからないのでしょうか」「なぜ…信じないのですか」と問いかけています。しかし彼らがイエシュアを信じない、解らないが故にイエシュアは十字架にかかることができ、死ぬことができたとも言えます。イエシュアが死ななければイスラエルとそれにつながる異邦人の罪は贖われず、誰も救われないこととなります。ですから神様のご計画のために、イエシュアを十字架にかけるために、ユダヤ人たちは無知であり不信である必要があったのです。出エジプト記 4:11 にこのような御言葉があります。

【新改訳改訂第3版】

出エジプト記

4:11 【主】は彼に仰せられた。「だれが人に口をつけたのか。だれが口をきけなくし、耳を聞こえなくし、あるいは、目を開いたり、盲目にしたりするのか。それはこのわたし、【主】ではないか。

この記述は、エジプトの奴隷となったイスラエルの民を解放するために、その指導者としてモーセを召し出す場面ですが、モーセは自分が口下手でうまく話せないことを理由にそれを断ろうとします。しかし彼をそのようにしたのは「このわたし【主】ではないか」と言っておられます。このように、私たち人間の見ることも聞くことも、すなわち理解する力もすべて神様にかかっているのです。神様によらなければ、私たちは何も知ることができないのです。それならばなおのこと、神様のご計画について、イエシュアについて、それらを理解させたりあるいは理解できなくさせたりするのはただ神様の御心、み旨によるものだということです。すなわちマグダラのマリヤが、よみがえられたイエシュアを実際に目の当たりにしても、それがイエシュアだと理解できなかったのは、ただ神様によることであり、そしてそれは同時にイエシュアを十字架にかけて殺したユダヤ人たちの無知、不信、盲目さを表した「型」であるとも考えられます。このような視点でこのマグダラのマリヤを捉えつつ、また記された事実が指し示す神様のご計画の「型」を探り求めながら、今日の箇所に入ってまいりましょう。

## 1. 名を呼ぶ

【新改訳改訂第3版】

ヨハネ

20:16 イエスは彼女に言われた。「マリヤ。」彼女は振り向いて、ヘブル語で、「ラボニ(すなわち、先生)」とイエスに言った。

イエシュアは「マリヤ」の名を呼ばれました。その瞬間、彼女はその声の主がよみがえられたイエシュアであることが解った、いや解らされたことが記されています。このようにイエシュアが名前で、名指しで人を呼ぶ記述は少なくともはありませんが、それらは12弟子(イスカリオテ・ユダも含む)や、ベタニヤの三兄弟マルタ、マリヤ、ラザロなど、ごく親しい者たちに対してのみです。ですからイエシュアのこの行為はマグダラのマリヤに対する親しさの表れだと考えられます。しかしそれ以上に、この名を呼ぶという行為が、聖書において重要な意味を持っていると考えられます。なぜなら出エジプト記 33:17、そしてイザヤ書 43:1 にこのように記されているからです。

【新改訳改訂第3版】

出エジプト記

33:17 【主】はモーセに仰せられた。「あなたの言ったそのことも、わたしはしよう。あなたはわたしの心にかない、あなたを名ざして選び出したのだから。」

イザヤ書

43:1 だが、今、ヤコブよ。あなたを造り出した方、【主】はこう仰せられる。イスラエルよ。あなたを形造

った方、【主】はこう仰せられる。「恐れるな。わたしがあなたを贖ったのだ。わたしはあなたの名を呼んだ。あなたはわたしのもの。

このように、名を呼ぶという行為は神様の選び、神様のもの、所有を表す行為であると考えられ、またイエシュアとマグダラのマリヤとの「名を呼ぶ」親しい関係の中に、神様とイスラエルの民との関係が表されているとも考えられます。

## 2. 先生

そしてそのイエシュアに対してマリヤは「ラボニ（すなわち先生）」と言って応えます。またこの後の 20:18 では「私は主にお目にかかった」と言っています。かつてイエシュアは弟子たちがこのようにご自分を呼ぶことについてこう言うておられました。

【新改訳改訂第3版】

ヨハネ

13:13 あなたがたはわたしを先生とも主とも呼んでいます。あなたがたがそう言うのはよい。わたしはそのような者だからです。

この記述から、マリヤは正しい答え方をしたと言えます。しかしマリヤにとって、イスラエルの民にとってイエシュアとは、単なるラボニ、先生、または主というだけの存在なのでしょうか。同じくこのヨハネの福音書にイエシュアを先生と呼んだ者の出来事がもう一つ記されています。

【新改訳改訂第3版】

ヨハネ

1:38 イエスは振り向いて、彼らがついて来るのを見て、言われた。「あなたがたは何を求めているのですか。」彼らは言った。「ラビ(訳して言えば、先生)。今どこにお泊まりですか。」

1:39 イエスは彼らに言われた。「来なさい。そうすればわかります。」そこで、彼らについて行って、イエスの泊まっておられる所を知った。そして、その日彼らはイエスといっしょにいた。時は第十時ごろであった。

1:40 ヨハネから聞いて、イエスについて行ったふたりのうちのひとり、シモン・ペテロの兄弟アンデレであった。

1:41 彼はまず自分の兄弟シモンを見つけて、「私たちはメシヤ(訳して言えば、キリスト)に会った」と言った。

この出来事は、かつてバプテスマのヨハネの弟子であったアンデレともう一人の弟子が、イエシュアに「来なさい」と言われ、イエシュアの弟子となる場面ですが、アンデレともう一人の弟子はイエシュアのことを最初は「ラビ（訳して言えば先生）」と呼んでいます。マグダラのマリヤと同じです。正しい呼び方なのでイエシュアはこれを否定しておられません。しかし彼らはイエシュアといっしょにいるうちに、イエシュアが単なる先生ではないことが解り、こう言うのです。イエシュアは「メシヤ（訳して言えばキリスト）」であると。こ

のようにイエシュアは確かにラビまたはラボニ、すなわち先生と呼ばれる御方でした。しかしそれだけではなく、それ以上の存在であることを覚えなければならないのです。イエシュアを十字架にかけたユダヤ人たちは、イエシュアが律法に精通したラビ的な存在であることは認めていました。しかし神様から遣わされた御子メシヤであることについては否定しました。よみがえられたイエシュアの呼びかけに「ラボニ（すなわち先生）」としか答えることができなかったこのマグダラのマリヤの姿に、イエシュアをメシヤとして受け入れないユダヤ人たちが「型」として表されていると考えられます。

### 3. 上る

20:17 イエスは彼女に言われた。「わたしにすがりついてはいけません。わたしはまだ父のもとに上っていないからです。わたしの兄弟たちのところに行って、彼らに『わたしは、わたしの父またあなたがたの父、わたしの神またあなたがたの神のもとに上る』と告げなさい。」

死んだはずのイエシュアが今目の前に生きておられる、マグダラのマリヤにとってこんなに嬉しいことはありません。思わずイエシュアの胸に飛び込んでいくような場面です。しかしイエシュアがそれをお許しになりませんでした。その理由は「わたしはまだ父のもとに上っていないからです。」とイエシュアは言われました。つまりマリヤがイエシュアに「すがりつく」ことができるようになるために「父のもとに上って」いくということですが、これは一体どういう意味なのでしょう。これをヘブル語の視点で考えるならば、「上る」という言葉の持つ意味が、私たちの日本語の持っているそれとは大きく違っていることがヒントとなります。「上る」ことをヘブル語でアーラー(אָרָר)と言いますが、この言葉が聖書で最初に使われた箇所が創世記 2:6 です。

#### 【新改訳改訂第3版】

#### 創世記

2:6 ただ、水が地から湧き出て、土地の全面を潤していた。

これは神様の天地創造の御業の一場面です。ここで「水が地から『湧き出て』」と訳されているのが本来のアーラーです。そしてアーラー、湧き出た水は「土地の全面」すなわち全地、全世界を「潤していた」、覆っていたと記されています。このように、本来のアーラーは、全地を覆うことを目的として「上る」ことを意味する言葉であると考えられます。つまりイエシュアが父のもとに「上る」アーラーするとは、イエシュアが御父である神様とともにこの地上を、全世界を覆う、すなわち統べ治める、支配することを指し示していると考えられます。イエシュアにすがりつこうとしたマグダラのマリヤがユダヤ人、イスラエルの民を表す「型」であると述べました。つまりイエシュアがこの地上に神の国、御国を建て上げ、全世界を統べ治めるその時こそがイエシュアとユダヤ人がすがりつく関係、すなわち親しい関係を持ち、神様とイスラエルの関係が回復される時であることが、この「父のもとに上る」というイエシュアの言葉が指し示す意味だと考えられます。

20:18 マグダラのマリヤは、行って、「私は主にお目にかかりました」と言い、また、主が彼女にこれらのことを話されたと弟子たちに告げた。

マリヤはイエシュアが命じられたとおり、自分が目の当たりにしたこと、聞かされたことを弟子たちに告げました。このように私たち教会とクリスチャンは、ユダヤ人、イスラエルの民が見聞きしたこと、すなわちイス

ラエルの歴史の中に表され、言い伝えられ、神様がユダヤ人たちによって聖書に記されたことを通して福音を受け入れ、信仰を持つようになりました。このマリヤの行動は、まさにその「型」であると考えられます。未だにイエシュアをメシヤ（キリスト）だと理解していないユダヤ人たちですが、彼らの存在なしに私たち教会とクリスチャンの今はないのだということを覚えなければなりません。

#### 4. 夕方

20:19 その日、すなわち週の初めの日の夕方のごとであった。弟子たちがいた所では、ユダヤ人を恐れて戸がしめてあったが、イエスが来られ、彼らの中に立つて言われた。「平安があなたがたにあるように。」

マリヤだけにではなく、よみがえられたイエシュアは弟子たちの前にも現れました。それが「週の初めの日の夕方」であったことが記されています。ユダヤ人たちの一日は朝からではなく「夕方」から始まります。ですから「週の初めの日の夕方」とは、最初の最初、始まりの始まりというような、何か新しいことが始まることを強調したような表現であると考えられます。また「夕方」のことをヘブル語でエレヴ(ערב)と言う名詞ですが、これが動詞になるとアーラヴ(ארב)となり、その意味は「誓約する、婚約する、保証人となる」となります。このアーラヴの最初の言及は創世記 43:9 にあります。

##### 【新改訳改訂第3版】

##### 創世記

43:8 ユダは父イスラエルに言った。「あの子を私といっしょにやらせてください。私たちは出かけて行きます。そうすれば、あなたも私たちも、そして私たちの子どもたちも生きながらえて死なないでしょう。」

43:9 私自身が彼の保証人となります。私に責任を負わせてください。万一、彼をあなたのもとに連れ戻さず、あなたの前に彼を立たせなかったら、私は一生あなたに対して罪ある者となります。

これはユダがその父イスラエルすなわちアブラハムの子イサクの子ヤコブに対して誓いを立てる、あることの「保証人となる」ことを宣言している場面です。このようにエレヴの動詞形アーラヴとは、ある勤めを必ず果たし終えるという約束、保証を指し示す言葉であると考えられます。つまりイエシュアは、これから弟子たちの身に起こること、神様がなそうとしておられることの保証を見せるために弟子たちの前に現れたということがこの「夕方」エレヴという時に示されていると考えられます。ではその保証とは何を指し示しているのでしょうか。それは「戸が閉められ」、そして「イエスが来られ、彼らの中に立つ」と記されていることに表されていると考えられます。すなわちイエシュアを信じる者はイエシュアとともに家の中に、そうでない者は外に、そしてその家の「戸が閉められ」ることが、「イエスが来られ、彼らの中に立つ」時に起こることです。つまりこれは神様の裁き、救いと滅びを指し示していると考えられます。

#### 5. 平安

そして「平安があなたがたにあるように」とイエシュアは言われましたが、「平安」を意味するヘブル語、シャーローム(שלום)の最初の言及を見てみましょう。創世記 15:15 です。

【新改訳改訂第3版】

創世記

15:15 あなた自身は、平安のうちに、あなたの先祖のもとに行き、長寿を全うして葬られよう。

ここで「平安のうちに」と訳されているのが聖書で最初のシャーロームです。そしてそれは「先祖のもとに行く」ことを指し示しています。ここで「先祖」と訳されているヘブル語はアーヴ(אָב)で、本来は「父」を意味する言葉です。しかも「先祖たち」ではなく、ヘブル語でも単数形で記されています。ですから「平安のうちに『父のもとに行く』」と訳することもできます。つまりシャーロームとは、イエシュアがマグダラのマリヤに語られたように「父のもとに行く」ことを指し示していると考えられ、すなわちシャーローム「平安があなたがたにあるように」とは、「あなたがたのために、わたしは父のみもとに行く」という意味があると考えられます。そしてそれは先ほど「上る」アラーというヘブル語について述べたように、父と子、神様と御子イエシュアが全地を統べ治める神様の国、御国を指し示していることにもつながってきます。

20:20 こう言ってイエスは、その手とわき腹を彼らに示された。弟子たちは、主を見て喜んだ。

イエシュアは十字架で受けられたその傷跡を見せ、確かにご自身であること、そしてよみがえられたことを示されました。イエシュアの十字架の死とよみがえり、これが事実である、本当にあったことであるというのは、私たちイエシュアを信じる者すべての喜びです。この事実があるからこそ私たちはそれを信じて救われるのですから、その証拠であるイエシュアの傷跡は、イエシュアを信じるすべての者の救いが完成するその日まで、すなわち神様のご計画の完成である御国が建て上がるその日まで、イエシュアの身体から消えることはないと思われまます。ですからこの弟子たちのように、イエシュアの傷跡は私たちイエシュアを信じる者にとっての喜びなのです。

## 6. 息を吹きかける

20:21 イエスはもう一度、彼らに言われた。「平安があなたがたにあるように。父がわたしを遣わしたように、わたしもあなたがたを遣わします。」

20:22 そして、こう言われると、彼らに息を吹きかけて言われた。「聖霊を受けなさい。」

「平安」シャーロームが「父のもとに行く」ことを指し示していると述べました。そしてそれは御父である神様と御子であるイエシュアが全地を統べ治めることをも指し示しているとも述べました。その時「あなたがた」すなわちイエシュアの弟子たちにどのようなことが起こるのかが示されていると考えられます。すなわちイエシュアは彼らに「息を吹きかけ」られました。この行為は「息あるもの、命あるものとする、生かす」という意味があると考えられます。なぜなら創世記 2:7 にこのように記されているからです。

【新改訳改訂第3版】

創世記

2:7 神である【主】は土地のちりて人を形造り、その鼻にいのちの息を吹き込まれた。そこで人は生きものとなった。

これは天地創造の六日目、最初の人であるアダムが造られたことの記述です。アダムは私たちのような両親の遺伝子を引き継いで生まれてきたのではなく、神様によって全く新しく造られたことが解ります。また他にこの「息を吹きかける」ことについて、エゼキエル書にもこのような預言があります。

【新改訳改訂第3版】

エゼキエル書

37:5 神である主はこれらの骨にこう仰せられる。見よ。わたしがおまえたちの中に息を吹き入れるので、おまえたちは生き返る。

このように「息を吹きかける」とは、土のちりからアダムが造られたような、全く新しく造られることと、このエゼキエル書に預言されているように、「骨」すなわち死んだ人が再び生き返ることの二つの意味を併せ持った表現であると考えられます。つまりイエシュアを信じる者が、イエシュアがよみがえられたようによみがえり、そしてその身体は以前のような朽ちるものではなく、罪を犯す以前のアダムの、造られた当初の状態、すなわち朽ちることのない永遠の身体が与えられることが示されていると考えられます。そしてその目的とは、「父がわたしを遣わしたように」という表現に示された御父と御子の関係、「わたしと父とは一つです（ヨハネ 10:30）」と言われた完全な親しい交わりが「わたしもあなたがたを遣わします。」と言われたようにイエシュアとイエシュアを信じるすべての者との間にも与えられるためであることが示されていると考えられます。もちろんこの後、弟子たちはイエシュアの福音を伝えるために全世界に遣わされていくのですが、イエシュアという御方が常に神様のご計画の完成である神様の国、御国の視点を持っておられる御方だと考えるならば、目先のことだけを指して言われたのではないと考えられます。またイエシュアは「聖霊を受けなさい」とも言われましたが、ヘブル語では「息」も「聖霊」も同じルーアハ(רוּחַ)と言い、本来違いがないことが解ります。ですからイエシュアはキリスト教を広めること、世界宣教をすることだけを思ってこれらのことを言われたのではないと考えられます。そうでなければ次にイエシュアが言われたことが理解できなくなるからです。

20:23 あなたがたがだれかの罪を赦すなら、その人の罪は赦され、あなたがたがだれかの罪をそのまま残すなら、それはそのまま残ります。」

当初の弟子たちに、また今日の私たちイエシュアを信じる者に、このような罪を赦したり、そのまま残したりする権威も力も与えられてはいません。それどころか「さばいてはいけません（マタイ 7:1）」とさえ命じられています。ですからこれはこの当時の弟子たちに対して、そして今日の私たちに対して言われたものではなく、神様の国、御国における新しく造られた者、よみがえらされた者に対して言われたことだと考えられます。なぜこのような権威を人が持つことができるのでしょうか。それは先ほど述べたように、御父と御子イエシュアがまったく一つであったように、イエシュアと私たちもそのような関係を持つことができるようにと、まったく新しく造り変えられるからです。

このように、イエシュアはよみがえられた姿を現わし、これらのことをなされたことで、神様がイエシュアを信じる者に与えられる救いとは、どのようなものであるのかを、まさに身をもって示してくださったのだと考えられます。ですから福音を宣べ伝えるとは、イエシュアを信じて救われることだけを伝えるのではなく、救われた者がやがて神様によってどのように新しく造り変えられるのか、すなわち神様のご計画のその完成を

宣べ伝えなければならぬと信じます。